

拔隊禪師の和文法語に就て

古 田 紹 欽

三光國師孤峯覺明の法嗣に甲州鹽山向嶽寺の開祖、慧光大圓禪師拔隊得勝がある。

この拔隊に漢文語録と和文法語とが現存するが、前者の漢文語録はともかくとして、後者の和文法語即ち鹽山假名法語と鹽山和泥合水集とは禪宗假名法語の代表的なものとして知られてゐる。

私は昨年来、鈴木大拙博士のもとに於て、禪宗假名法語の思想的文献的研究に携る機會に恵まれた。さうしてその一成果として、今秋までには鹽山假名法語と鹽山和泥合水集とを併せ收めて、博士と共同編校の名にて拔隊禪師法語と題し、刊行する運びになつてゐるが、この刊行に際して、調査研究した覺書の斷片を次に記さう。

先づ第一に鹽山和泥合水集三卷に就て見よう。漢文の鹽山拔隊和尚語録六卷の卷末に拔隊の法嗣通方明道はかう云つてゐる。

師(拔隊)生于嘉曆二年丁卯十月六日。至徳四年丁卯二月二十日已剋寂滅矣。閱世六十有一。僧臘

三十有一。塔扁眞身臺。師在日之語句雖有如許。和泥合水三冊在世鈔梓。其餘小佛事偈頌垂示問答遺誠行錄。如今成九卷。而置之本庵向岳室中矣。

至德四年丁卯端午日

明道誌之

此處に「和泥合水三冊在世鈔梓」とある如く、和泥合水集は至德三年仲春十五日に開刻になつてゐる。至德三年は拔隊入寂の前年に當る。この三年版の刊記には

于時至德三年^{丙寅}仲春十五日 始之

幹緣比丘 明道

とある。幹緣比丘明道の明道は云ふまでもなく通方明道のことである。

和泥合水集が刊行になつた動機は、この集の下卷の末尾に、

「師居甲州鹽山時。有身邊隨侍僧將此冊出曰。近日應僧尼道俗等之疑問。被對示垂手之語。少々記集今有三冊。禁不獲已而寫之去者漸多。如是妄展轉書寫之。故文字烏焉作馬。理趣也隨參差。恐令見人錯還受罪。所以擬開板。又以假名字書之。而欲教不識字輩普見易。請師安首題名。師云。非是予本意。這般和泥合水之野語。安著什麼首題之名字乎。雖然與麼。若要爲兒孫作警策曲。一任命工鏤梓焉。因號之鹽山和泥合水集耳」。

とあり、僧尼道俗等の疑問に應へられた法語を、隨侍の僧が祕に筆録し、後世の誤傳を慮り、拔

隊の許しを得て刊行したものである。隨侍の僧とは何人が明確ではないが、明道が恐らく自己の名を伏せてかく云つたのではなからうか。法語を筆録するものは、この文によれば當時漸く多きを加へたといふが、この隨侍の僧が拔隊に呈示し、首題を請うたものは少くとも烏焉馬の誤のない正しいものであつたに相違ない。即ち現存の至徳三年本は當時の決定本であつたわけである。實際、拔隊自身に於てもこの筆録本は校閲もしたものであらう。

扱て、この至徳三年版とは如何なるものであらうか。我々の研究に對して絶えず支援を惜しまれない、積翠文庫主石井光雄氏は、この至徳版が細川侯爵家に所藏せられてゐることを教へ、その閱覽に對する斡旋の勞を取られた。

私の見た至徳版はこの細川家所藏のものであるが、他に同版の現存するものは殆んどないのではなからうか。

至徳版の形式と構成は、美濃紙版三卷本で、上卷四十二紙、中卷五十九紙、下卷四十五紙、各卷四周單邊、半葉九行、一行の字詰二十字前後の木版本であり、本文は漢字混りの片假名である。上卷下卷は初葉の右下邊外に、中卷は見返し左隅に權英なる刻者の名を出してゐる。細川本に就て知る所を記せば、上卷下卷の卷末には墨で「前永平大中六世快叟代（花）寄附善益庵主」（中卷ノミハ代ハ）「（老納ニ作ル）」

〔下ハ善益庵主寄
卷附之ニ作ル〕と奥書がある。

快叟は快庵妙慶―培芝正悅―圭庵伊白―龍州文海―海庵尖智―快叟良慶と法を嗣いだ曹洞宗下野大中寺の六代で永祿の頃にこの寺に住した人である。以下同じく墨書で上巻末に「太歳丁卯重陽廿八日」とあるが丁卯は恐らく永祿十年ではなからうか。上巻見返しの左隅には「惠明爲に説ム、不思議不思惡正與變時那箇是明上座本來面目、言下大悟」とあり、又各巻見返しの中央には共に「付與玄碩九易叟^四」とある。九易なる人も玄碩なる人も詳かでない。又、善益庵主が誰であるかといふことも知られない。臆測であるが此等の人々は曹洞禪に屬する人達ではなかつたかと考へる。この和泥合水集が洞門の快叟の如き人に如何にして藏せられるやうになつたかといふ理由は知るべくもないが、拔隊が加賀の峨山に相見したといふやうな洞門との因縁によつてこれが尊重せられたのではあるまいか。

次にこの細川本の表紙に就てであるが、細川本は至徳三年刊行當時そのまゝの表紙ではなく、文政九年以後の表紙の改装がある。下巻の裏表紙の貼込みに一休のことに關して書いたものがあり、その終の方に「文政九年冬江戸ニ而求之」と見える。又、裏表紙の内に「善益庵主寄附之」とあるの一字の下部は改装に際して裁斷されたものゝ如く缺けてゐる。表紙の裁斷と同じく本紙も天地

は僅であるが斷ち切られてをり、本の縦は美濃紙版よりはやゝ短い。

然し原型は改装はされても充分保存されてゐるやうに窺はれる。

至徳版の價値は書誌學に見て大であるといふことは云ふまでもないが、内容の上に於ても「關」を「開」に、「宋」を「宗」に等々の誤つたやうな例を除けば、これ以後の版に見られるやうな脱字がなくて、版本としては最も優れたものである。寛永以後、江戸時代から最近までの間、この書の新刻重刻になつたものは數本あるが、一本もこの至徳版を底本としたものはない。至徳版が印刷されたのは極めて少部數で、江戸時代にあつても容易に見られなかつたものに相違ない。但し、至徳版の板木が早く失はれたといふのではない。私はこの五月末向嶽寺に出張して勝部敬學老師及び田邊宗英氏の厚意により大悲閣を調査した時、この至徳版の大部分の板木を發見したのである。白蟻のために多く損はれて、この現存板木によつて新に刷るといふことは残念ながら困難であるが、私はその損はれたうちにも窺はれる特異な版式に注意を拂ひ、一枚一枚調べて行くうちに前記細川、本にある如き刊記にある部分を見出した。この板木に就ては専門家の詳しい研究を俟つべく、此處に一言報告しておく。

次に至徳版について開板になつたものに寛永の木活版がある。美濃紙版三卷本で上卷三十八紙、

中卷四十九紙、下卷三十六紙、四周單邊、半葉十行一行二十字詰で、下卷末に「寛永丙寅林鐘日板開」と刊記がある。漢字混りの片假名本で、漢字に振假名を附さず、濁點も句點もない點は全く至徳版と同じである。寛永版は至徳版によつたに相違ないが、この寛永版になると既に脱字があり、これがためにこれ以後の版が悉くこれによつて脱字そのまゝに刊行されてゐる。私は寛永版を京都陽明文庫に於て被見した。木活本として貴重なものである。

寛永版に更に次いで板行になつたものに慶安二年版があると云はれる。恐らく鹽山假名法語の慶安版と同時に開板になつたものであらうが、私は未だこの版を見る機會を得ない。今津洪嶽師は佛書解説辭典のうちに、向嶽寺にこの版があると書かれてゐるが、私の調査した所では現存しなかつた。

今日最も流布してゐるものは、書林古川參郎兵衛の刊行になる三卷本である。本版は刊行年時を缺くも元祿版であると推定せられる。本版は書林古川參郎兵衛と刊記のあるもの、或は書林參郎兵衛と刊記のあるもの等が有るが、何れも同版で刷に前後の相違があるに過ぎない。本版は漢字には振假名を附し、句點濁點を施して極めて讀み易くしてをり、一般化をはかつたものと思はれる。

元來、この和泥合水集は隨侍の僧が假字を以て書したもので、拔隊自らが、普及化を豫測して筆

を取つたものでなく、假名法語と云つても所謂それとは趣を多少異にするものであるが、内容の傑出してゐるものである點から、自然と後人によつて振假名、濁點、句讀點等が施されて益々大衆性を持つやうになつた。明治以後の活版本だけでも數種を擧げることが出来るのである。刊本の禪宗假名法語としては夢窓疎石の夢中問答が古いが、それにつぐ古さと加ふるに普及性を具へた點に於ては本書は假名法語の思想的、書誌學的研究に先づ以て注意さるべきものと思ふ。

第二には鹽山假名法語一卷に就てである。鹽山假名法語は拔隊法語とも鹽山假字法語とも云はれる。

本書は十三項の宗要を示した消息文を編輯したもので、最初の一消息のみは宛て人の名を缺くが、他は悉く宛名を明にしてゐる。此書の最も古い刻本は私の知る範圍では寛永廿年版である。寛永廿年と云へば、拔隊歿後二百五十有餘年にもなるのであつて、寛永廿年版が最も古いといふことは、和泥合水集の在世中の刊行に較べ考へて不思議なことであると云はねばならない。これは誰しも疑問とする所であらうが、私はこの鹽山假名法語は後世の編輯であると考へる。その理由は先に漢文語録の卷末にある明道の誌を擧げたが、そのうちに「和泥合水三冊在世鈔梓、其餘小佛事偈頌垂示問答遺誠行錄。如今成九卷」とあるからである。明道によれば師の著作は合して九卷を成す

と云つてゐる。九卷のうち三卷は和混合水集で、其餘のものが六卷であるわけであるが、小佛事から遺誠・行録を含めた現存の鹽山拔隊和尚語録六卷がこれに相當する。語録は拈香佛事上下二卷、乘炬上下二卷、法語（漢文）と偈頌で一巻、問答・垂示・遺誠・行録で一巻、合して六卷をなしてゐる。現存語録は向嶽寺第三世、後に八王子の廣園寺開山となつた峻翁令山の重録したもので、必ずしも明道のいふものと同一の卷の別け方ではなかつたかも知れないが、明道のいふものがもとなつてゐることは明かであり、そのうちには鹽山假名法語が含まれてゐないことは確かである。勿論九卷のうち和混合水集のみ至徳三年に刊行になり、他は寫本のまゝ存したのであるが、その寫本のなかに鹽山假名法語はなかつたのである。

従つて私は鹽山假名法語の成立を後のものであるといふのである。本書には序も跋もなく、成立を推測する一切の手がかりが存しないが、少くとも峻翁令山は本書に就て知つてゐない。漢文語録は慶安四年書林中野氏は誰によつて刊行になつてゐるが、鹽山假名法語はこれより九年前、寛永廿年、同じ書林の中野氏は誰によつて初めての開板を見たものゝ如くである。

この寛永廿年版は一巻本三十六紙、四周雙邊、半葉九行、一行の字詰廿五字前後で、本文は漢字混りの片假名であり、漢字には振假名を附し、濁點、句讀點がある。卷末刊記には「寛永癸未中春

吉辰中野氏は誰新刻」とあるが、特に新刻とあるこの二字は看逃さるべきではなからう。

寛永版に次ぐものに「慶安二己丑曆仲春望」の刊記のある慶安二年版がある。慶安版は題簽を穢
 隊法語とし、内題を鹽山假字法語とし、本文の最初に消息の内容目次を擧げてゐる。美濃紙版一卷
 本四十四紙で、四周單邊、半葉十行、一行字詰は十九字前後であり、寛永版同様に漢字には振假名
 を附し、濁點、句讀點がある。唯本文は漢字混りの平假名である。最初の原寫本が片假名であつた
 か、平假名であつたか判明しないが、消息であつたから或は平假名であつたかも知れない。慶安版
 は必ずしも寛永版を底本とした如くには思はれず、編輯の體裁も相違するし、寛永版の「又」「な
 り」「則」等は慶安版では「亦」「也」「すなはち」と作り、或は原稿となつたものが異なるものであ
 つたかと考へられる。

慶安版については享保二年に伊藤氏によつて開板されたものがある。假名は片假名で一卷三十六
 紙、一紙九行で一行の字詰は不定である。この板木は現に向嶽寺に前記の至徳版和泥合水集の板木
 と混雜して現存してゐる。刊記に「享保丁未十月穀旦 伊藤氏開板」とある。

この外、「寺町蛸薬師上ル町小川源兵衛」又「寺町藤屋三郎兵衛」とのみの刊記のあるものから
 無刊記の異版は數本存しよう。私の見たものでも二種は確實にある。

憶ふに鹽山假名法語は鹽山和混合水集に比して、消息文であるだけに一層内容が平易であり、江戸時代に流布した程度から云へば、この方が和混合水集よりは大きかつたやうに窺はれる。

鹽山假名法語が一般に流布したことに就て考へられることは、思想的に如何なる方面に影響を及したかである。これは今後の研究に屬するのであるが、武士道の寶典と云はれる葉隱の如きにも本書が引かれてをり、この一事から推しても叢林のみならず在俗の間に影響した假名法語といふものを詳しく研究調査しなければならぬであらう。参考のために葉隱に引く所を舉げれば

『鹽山法語ニ、少年ヨリ一ツノ疑ヒ起リテ候ヒシ。抑コノ身ヲ成敗シテ誰ト問ハ、我ト答フル物ハは何物ゾト、一念疑初ルヨリシテ歳ノ重ル儘ニ、疑深フナルニヨリテ、出家セント思ヒ立ち候ヒシ時、一ツノ大願力起リテ候ヒシ。迺モ出家スルトナラバ、獨一身ノ爲ニ道ヲ求メジ。諸佛ノ大法ヲ悟リテ、一切衆生ヲ度シ盡シテ後ニ正覺ヲ成スベシ。又若シコノ疑ヲ明メザラン中ニ、佛法ヲ學セジ。又僧家ノ禮ヲ學セジ。人間ニ交ラバ善知識ノ下ト山トヨリ外ニ身ヲ置カジトナリ。出家ノ後殊ニ疑モ深フナルニ隨ツテ、コノ願モ深ク起リテ候ヒシ様ハ、前佛已ニ涅槃シ、後佛未世ニ出デ玉ハザル中間ニ、佛法ノ絶エン時ニ於テ、無佛世界ノ衆生ヲ度センニ、障ナキ程ノ大道心ヲ起サバヤ。縱令コノ愛見ノ罪ニ依ツテ、無間地獄ニ墜ツルトモ、衆生ノ苦ニダニ代リ得バ、

スコシモ退屈スル事ナクシテ生々世々未來際ヲ盡スマデ、コノ願ヲ失ナハジ。又修行ニ於テ、生死相見ニ滯ラジ。小善根ヲ修シテ寸ノ暇ヲフヤサジ。又自ラソノ力至ラザランニ、人ヲ利益シテ人ノ眼ヲ潰サジト、コノ願心ノ僻トナリテ、工夫ノ障ト成リ候ヒシカドモ、止ム事ヲ得ズシテ、諸佛ニ對シテモ、常ニコノ願ヲ達シテ候ヒシホドニ、一切ノ善惡ノ縁ニ對スル時モ、唯コノ願ヲ行ジ、諸天ノ眼ヲ友トシテ、今ニ至リテ候ナリ。

奉公人の大願も斯くの如くなるべし』(聞書第十一)

とある。これは拔隊が正法庵主に與へた消息のうちから抜き記したものである。漢文語録は字句の難解である點で、殆んど學識ある禪者の手より以外に擴ることがなかつたが、假名法語は禪者よりも寧ろ在俗の手にあつたと云ふべきである。さうしてそれが宗教的な教へとしてあつたばかりでなく、讀み物としての文學的な價值も多分に持つたものであつた。

以上鹽山和泥合水集と鹽山假名法語に關する覺書的一端を甚だ蕪雜に敍べた。本稿は何れ訂正を加へて假名法語全體の研究のうちに詳細に纏めて論ずるであらう。(一八・七・三〇)